

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅非がん患者の看取り場所選択に影響する因子の検討
演者名	○森田浩嗣、稲井理仁、梶本心太郎、沖代奈央、白山宏人
所属	医療法人拓海会 大阪北ホームケアクリニック

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告      2. 症例シリーズ報告      3. コホート研究 4. 症例対照研究    5. 調査研究      6. 介入研究      7. 二次研究 8. 質的研究      9. その他研究	NO.
		4

【目的】年間死亡者数が増加してくる今後十数年間において、病院での看取り数には限界があり、施設や在宅での看取り数の増加が課題となってくる。当院で診療を行った在宅非がん患者の看取り場所とその背景を検討し、在宅看取りの可否に影響を与える要因について検討する。

【方法】対象は、当院で訪問診療を行った、2009 年 1 月から 2013 年 12 月までの 5 年間に、在宅または病院で死亡した非がん患者 139 名。診療開始時に聴取した看取り希望場所と、実際の看取り場所との人数の推移を調査した。次に、在宅死 (A) 群、病院死 (B) 群、検視群に分類し、A 群と B 群において、年齢、性別、Ⅲ a 以上の認知症の有無、診療日数、介護者数、および S T A S - J 評価を用いて比較検討した。

【結果】診療開始時の希望は、在宅 68 名、病院 7 名、未定 64 名。在宅希望のうち 9 名が病院死、病院希望のうち 1 名が在宅死、未定のうち 24 名が在宅死、37 名が病院死、3 名が検視となった。病院死となった患者の平均入院日数は、23.7 日 (最長 95 日)。A 群は 84 名、B 群は 52 名。A 群は B 群に比して、高齢 (85.5 歳/80.5 歳)、認知症率が高い (73.8%/46.1%)、家族の不安が少ない、家族の病状理解が良い、患者と家族の関係が良い、家族と医療者の関係が良い傾向がみられた。性別、診療日数、介護者数には有意差がみられなかった。

【考察】病院希望でなかった患者の入院の契機は、急な状態変化があり家族の不安が増大したことと、医療者が治療により回復を見込めると判断したことであった。ただし、以前の入院で認知症周辺症状が悪化した経験がある場合は、家族は在宅を選択する傾向があった。在宅死を選択する要因として、①加齢に伴う状態低下の中で死を受け容れる気持ちが整い、②苦痛症状が少なく、家族が病状理解をし、家族と医療者とのコミュニケーションが良好なことで、本人と家族が安心感を持って、③患者と家族の関係性が良いことで、家族の介護負担感が少なくなることが必要と考えられた。